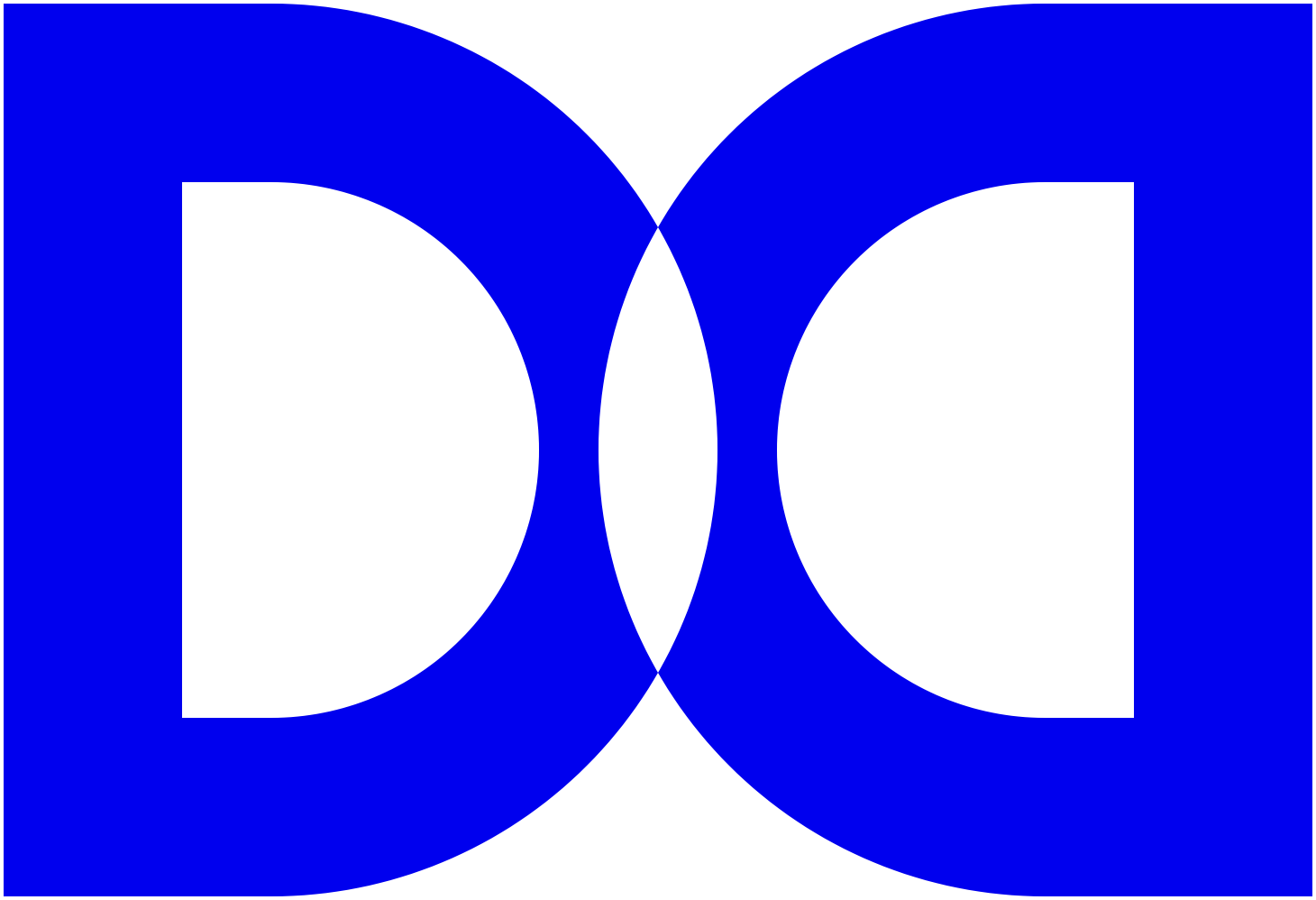
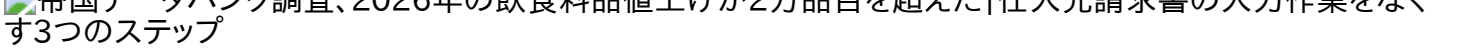




COLUMN｜2026.11.03｜AI活用

帝国データバンク調査、2026年の飲食料品値上げが2万品目を超えた。仕入先請求書の入力作業をなくす3つのステップ

帝国データバンクの調査によると、2026年の飲食料品値上げ品目数は2万327品目に達し、2年連続で2万品目を超えました（2026年9月30日発表）。単価の変更が頻繁に起きる環境では、仕入先から届く請求書・納品書をその都度確認し、会計システムや在庫システムに手入力・転記している担当者の負担が増し続けます。値上げが常態化した今こそ、仕入先書類の入力作業を仕組みで解消するタイミングです。AI-OCRで「書類が届く→読み取る→システムに入る」を自動化する3つのステップを解説します。

この記事の要点

- 2026年の飲食料品値上げは2万品目超（帝国データバンク調査）。品目単価が変わるたびに仕入先請求書の手入力作業が発生し、担当者の負担が増し続けている。
- AI-OCRは仕入先ごとに書式が異なる請求書・納品書を自動読み取りし、会計システムや在庫システムへ転記する工程を丸ごと自動化できる。
- 導入は「月間処理枚数と書式の把握→上位3〜5書式でPoC→会計・在庫システムとの連携」の3ステップで段階的に進められる。

DOCUMENT ― 図解PDF資料

この記事を、図解資料（PDF・全4ページ）にまとめました

仕入先書類の入力フロー整理シート・AI-OCRのPoC進め方・システム連携チェックリストを1冊に整理。下記をご入力のうえ、ダウンロードください。

会社名 株式会社○○
お名前 山田 太郎
メールアドレス you@example.com
入力してダウンロード ↓

2026年、飲食料品の値上げは2万品目を超えた

帝国データバンクが2026年9月30日に発表した調査によると、2026年10月に値上がりした飲食料品は3,153品目にのぼり、2026年通年での値上げ品目数は**2万327品目**に達しました（2025年は2万5,768品目）。原材料費・輸送費・エネルギーコストの上昇を背景に、2025年に続いて2年連続で2万品目を超えたことになります。

食品製造・食品卸・飲食業・食品小売にとって、仕入単価の変動は毎月・毎週のレベルで発生する日常事となっています。値上がりを通知する書類が届くたびに、担当者は請求書・納品書・単価改定通知を開き、内容を確認し、システムに転記する――この作業が静かに積み重なっています。

自社に当てはまる課題はいくつありますか

次のチェックリストは、仕入先書類の処理に課題を抱えている企業に共通するポイントです。3つ以上該当する場合、AI-OCR導入による効果が期待できます。

チェック	課題の内容
☐	仕入先ごとに請求書・納品書の書式が異なり、読み取りに時間がかかる
☐	請求書の数字を会計ソフトや在庫システムに手入力している
☐	値上げ通知が来るたびに単価マスタを手動で更新している
☐	月末の請求書照合・突合に毎月数時間以上かかっている
☐	入力ミス・転記漏れが月に1件以上発生している
☐	担当者が休むと書類処理が止まる、属人化している

飲食料品の値上げが続く環境では、単価変更の通知書類の数も増えます。「以前は月10枚だったのが今は30枚になった」という事務担当者の声も珍しくありません。人手で処理を続ける限り、この比例関係は解消されません。

現在の仕入先書類処理を確認する6つのポイント

AI-OCRの導入を検討する前に、現状の処理フローを整理することが重要です。次の6点を確認しておくと、要件定義がスムーズに進みます。

- **月間の処理枚数**：受け取る請求書・納品書の合計枚数（PDF・紙・メール添付を含む）
- **仕入先の数と書式の種類**：取引先ごとに書式が統一されているか、複数パターンがあるか
- **受け取り方法**：紙（郵送・FAX）・メール添付PDF・電子請求サービス（EDI）の割合
- **抽出が必要なデータ項目**：品名・数量・単価・税率・合計金額・請求書番号・発行日など
- **連携先システム**：会計ソフト（弥生・freee・マネーフォワード）、在庫管理、発注管理など
- **現在の処理工数**：1枚の書類処理に平均何分かかっているか、月間の合計時間

これらを整理するだけで、「月何時間の削減が可能か」という概算が出ます。月50枚・1枚10分の処理であれば月間約8時間。これが300枚なら月間50時間に相当し、専任担当の工数が丸ごと変わります。

AI-OCRで仕入先書類を自動入力する3つのステップ

AI-OCRを活用して仕入先請求書の入力作業を自動化するには、次の3つのステップで段階的に進めることが現実的な進め方です。

ステップ1：月間処理枚数と書式の全体像を把握する

最初にすることは、現在処理している書類の全量調査です。過去3ヶ月分の請求書・納品書を集め、仕入先別に「書式のパターン数」「枚数」「入力先システム」を一覧化します。

この調査で明らかになることは2つです。①処理量が最も多い仕入先（PoCの優先対象）と、②書式のばらつき具合（テンプレート型AI-OCRか、AI自動識別型か、を選ぶ判断材料）。調査は表計算ソフトで十分です。まず「見える化」することが、導入後の効果測定にも役立ちます。

ステップ2：上位3〜5書式でPoCを実施し精度を確認する

全書式を一度に自動化しようとするのは、初期コストと調整工数が膨らむ原因になります。まず取引量上位の3〜5社の書式に絞ってPoC（概念実証）を行い、AI-OCRが実際の書類をどの精度で読み取れるかを確認します。

PoCで確認すべき指標は次の3点です。

- **文字認識率**：品名・数量・単価・合計金額が正しく読み取られているか
- **レイアウト対応力**：仕入先ごとに異なる表の配置・フォントでも安定して読み取れるか
- **エラー検知**：認識に自信がない箇所を「要確認」としてフラグ立てできるか

認識率が95%以上であれば実用域です。残り5%の要確認箇所を担当者が目視確認するハイブリッド運用にすることで、ミスゼロを維持しながら大幅な時間削減が実現します。

ステップ3：会計システム・在庫システムとの自動連携を組む

PoCで精度が確認できたら、読み取ったデータを既存システムへ自動で受け渡す連携を構築します。主な連携方法は3つです。

- **CSV連携**：AI-OCRの出力をCSV形式で書き出し、会計ソフトのインポート機能に取り込む。初期費用が低く、既存システムを変えずに始められる最もシンプルな方法。
- **API連携**：AI-OCRと会計・在庫システムをAPIで直接接続し、読み取りと同時にシステムへ反映する。手動作業がゼロになる一方、開発工数が必要。
- **RPA連携**：RPAツール（UiPath・Power Automateなど）を仲介し、AI-OCRの出力を既存システムへ自動入力する。APIが公開されていないレガシーシステムでも対応できる。

飲食業・食品卸の多くは弥生会計や勘定奉行など国内パッケージを使っているため、CSVインポートから始めてRPA連携へ段階的に移行するパターンがコスト面で現実的です。連携対象は「品名・数量・単価・合計金額の仕訳入力」から始め、慣れてきたら単価マスタの自動更新まで拡張できます。

自社の仕入先書類の処理、AI-OCRで自動化できるか確認してみませんか。

現在の処理フロー・書類の種類・連携したいシステムをお聞きし、どこから始めるかをご提案します。ご相談・お見積りは無料です。

無料で相談する →

よくある質問

▶ AI-OCRは手書きの請求書や納品書にも使えますか？
▶ 仕入先が数社から数十社いますが、それぞれ書式が違います。AI-OCRは対応できますか？
▶ AI-OCRで読み取ったデータはどのシステムに連携できますか？
▶ 導入にかかる費用と期間の目安はどのくらいですか？

出典

- 帝国データバンク「2026年10月の飲食料品値上げ、3153品目」2026年9月30日発表 ― https://www.ryutsuu.biz/commodity/s093014.html（参照：2026年11月3日）
- nippon.com「2026年の食料品値上げ、2万品目を超える見込み」― https://www.nippon.com/ja/japan-data/h02899/（参照：2026年11月3日）

関連記事：FAX・紙の受注書をAI-OCRで自動処理する――受注側の入力作業を仕組みで解消する

株式会社DnDでは、仕入先請求書のAI-OCR読み取り・会計システムへの自動連携・帳票処理フローの設計まで、食品業界・流通業の実情に合った開発・導入サポートをご提供しています。「まずどこから手をつければよいか分からない」という段階からでもお気軽にご相談ください。

無料で相談する →

← コラム一覧へ

DISTILL N DEVELOP
株式会社DnD（DnD Inc.）
埼玉県さいたま市大宮区桜木町2丁目3番地 大宮マルイ7階

© 2026 DnD Inc. ― Distill n Develop.